

李滂と白堅(三補)*

高田時雄

先日¹臺北の歴史語言研究所で行われた「敦煌遺書の現状與研究」學術講演會に出席する機会があった。この講演會は副題に「《傅斯年圖書館藏敦煌遺書》出版誌慶」とあって、同所が所藏する敦煌遺書の圖録が正式に出版されたことを記念するための催しである。講演に先立って、史語所と敦煌遺書の関わりを回顧しつつ、今回の出版に至るまでの経緯が、李亭佑氏により「《中央研究院傅斯年圖書館藏敦煌遺書》工作報告」として説明された。その中で李滂についての意外な事実を知り得たので、特にここに書き留めておくことにした。實を言えば、これは筆者には全く豫期しなかった事柄で、いささか虚を衝かれた感がある。問題は史語所の所長であった傅斯年(1896-1950)が1929年に李滂に宛てた以下の書簡原稿である。引用するにはやや長きに過ぎる嫌いはあるが、その重要性に鑑み、省略せず全文を掲げることにはしたい。書翰はすでに近年刊行の『傅斯年遺札』に収録されている²。

少微先生執事：昨日承教，佩荷何極。比想 興居百福，爲祝。寅恪先生與弟商延聘先生加入 敝所事，得下列之意見，謹述其概，以供採擇。歷史語言研究所設置之意義，大略如附上一文「中央研究院歷史語言研究所工作之旨趣」所說，此意不敢自以爲必是，然此日爲此學問，欲對歐洲、日本人而有加，瞻吾國前修而不慚，必于材料有所增益，方法有所改革，然後可以後來居上，故 敝所設置之意，無非刊布材料，供之于人，整理材料，以爲結論，但爲客觀之業，不作一家之言，凡共此好者，皆同志也。故一切計畫、設施，乃至一切支出，無不公開，無非欲聊盡此時之責任，以求不負此日國家締造之會。先生以家學夙業，不我遐棄，欣幸何極，名義擬即用「特約編輯員」，董彥堂、徐中舒、趙萬里諸先生皆此名義，已向院中請發聘書。專任編輯員，常川駐所，不得^a兼職，月

*小文は日本學術振興會科學研究費基盤研究(A)「中國典籍日本古寫本の研究」(60150249、代表者：高田時雄)による研究成果の一部である。

¹2013年12月10日。

²王汎森・潘光哲・吳政上主編『傅斯年遺札』全3巻、2011年10月、中央研究院歷史語言研究所刊。當該書翰はその第1巻、243-245頁に収録。

薪百五十至二百五十；特約者，例無，然如有一定之工作，可支津貼若干。此時敝所事浮于貲，在舉行中之事業，不下十數，（如方言調查、人類學調查、安陽發掘、整理檔案等。）而院中又限制薪俸，絕不許過預算之半，故目下極感拮据，其丁山先生一部事，目下竟無款支付。（日內油印現下實支情狀，當寄上一份，現亦可到敝處取觀。）然在 先生一事中，寅恪兄與弟當竭力籌之。

伏思此日盛業，為刊布祕笈，及其他材料，此不董敝所之祈求，亦造成風氣之惟一途徑。遠者不必論，即如近日羅叔言先生之功績，無不在其刊布新獲材料之中，此不可以譁絳議之，十五年中，中國學問能開一新面目者，此種刊行之效也。然羅君收藏不富于尊府， 先生少年積學，見畏于羅君，如于 尊府所藏各類品物，以及祕卷寶笈，為之影照刊印，校訂考正，則今後風氣，不採于 先生，又何屬焉！此非董一人之榮華，抑亦世代之盛業。寅恪兄及弟盼 先生於此一條陳有所採納，果能以類相從，編為單冊，以新式之印術，成精緻之刊本，合嚴整之攷定，于本來之面目，例如「敦煌卷子」、「魏唐石刻」、……之類，標目為尊府所藏，署名為 先生所撰，羅君老者，當羨琢之。研究所所負之責任，為酌發印費，版權收入仍屬於作者，若攷證上有時需用襄助，研究所同事當盡其所能，且材料均不必交所，由 先生在家自組人影印抄編，由所支費，即可。如此可省遺失之慮，在敝所亦可減輕其責任。綜約言之， 先生自編，於一定期間，如一月或二月交稿一次，綢將內容大略與所商定，俟交稿及商定後^b所中即為先生付印，再與商務印書館等定一契約，為之代銷，其板權所得，壹以歸之著者。如此似嫌研究所何以但任其勞，實係弟等素志，切願因新材料之刊布，使中外學人得新知識，得廣眼界，而成實事求是，益擴材料之任風氣耳。 先生為此項編定，每月必銷磨若干時日，所中當贈月津五十，為數至少，甚為慚愧。然此日院中迫於需要，鼓動刊印，限制薪水，正無奈何，但杏佛先生謂夏後預算當增若干，宜徐圖耳。如何，請與寅恪詳商，並願駕聘天津前，弟獲一趨 左右也。匆匆，敬頌

著安不備。

弟傅斯年啟

木翁老先生處同此，敬頌 康安。

a) 陳寅恪附註：「擬加此數字，尊意如何？」

b) 陳寅恪附註：「擬加此數語，尊意如何？乞酌。」

この書翰で、傅斯年は李滂に對し幾つかの條件を示しつつ、史語所の「特約編輯

員」への就任を勧誘している。特約編輯員は原則として無給だが、「敦煌卷子」「魏唐石刻」など李家の所藏品の中から自由に題目を選定し、李滂の名義で出版すること。印刷経費は研究所が負擔し、しかも版權及び収入は作者に歸屬する。必要があれば研究所の同僚は援助を惜しまない。また所藏資料そのものを所に提出する必要はなく、自宅で作業を進め、影印や抄寫の人員を雇用する場合には、所がその経費を負擔する。加えて月五十元の手當も提示されている。

李滂は光緒三十三年（1907）十月八日の生まれであるから、この時まだ満年齢で二十二歳にもなっていない。この年、民國十八年（1929）には北平民國大學の目錄學校勸學の教員であったというが³、一介の無名學徒である。これだけを聞くと、破格の拔擢であり、いかにも悪くない条件と言うべきであろう。しかしこの勧誘の眞の目的が、學者としての李滂自身というよりも、李家の所藏品であることは分かりきった事實である。そのことがかえって李滂の自尊心を傷つけたか、或いはまた父親の李盛鐸の反對があったか⁴、眞相は藪の中だが、いずれにせよこの話は纏まらなかった⁵。

この書翰には年紀を示す直接の情報はない。しかし『傅斯年遺札』の編者がこれを1929年に懸けるのは、恐らく正しい。というのはちょうどこの時期に李滂自身が書き残した日録があり、史語所への招聘の事情と関連すると思われる部分がそこに見られるからである。ここに日録というのは、李滂文書⁶中の『友語録』と題するわずか数枚の殘稿だが、その中に以下のような記事が見える。

六月廿日（陽曆七月廿七日）聊城傅孟眞先生斯年邀 家大人飲於什刹海會賢堂。予侍，綯有楊杏佛（楊子木觀察文孫）、朱筠仙、董^マ、周⁷、翁有麟、陳寅恪、趙萬里。家大人與朱先生談其所藏鈔本酈注水經，勸其景印，綯言戴注水經雖精，乃非舊傳面目。此事甚重大，須速印不可

³李滂の自筆履歷書による。『敦煌寫本研究年報』第6號掲載の小文「李滂と白堅・再補」を参照されたい。

⁴1935年、白堅が來日して李滂の母親探しをした時、それを伝える新聞記事の中に、李滂が京大教授羽田亨から博士論文を出してはどうかと勧誘されたが、父親の李盛鐸から、まだ若い、もっと深く研究するまで待てと諭されたことが見えている。小文「李滂と白堅」『敦煌寫本研究年報』創刊號（2007）5頁。眞實のほどは不明だが、李盛鐸が李滂の身の處し方に氣を遣っていたことが伺われる。李盛鐸は1934年はじめに逝去しているから（王姓「藏書家李盛鐸卒年辨正」『文獻』2010年第4期、191頁）もしそのことがあったとしても、1935年よりは以前の事に屬する。それより更に前の1929年時點で、史語所からの話に李盛鐸が易々と許可を與えたとは思えない。

⁵史語所には李滂の傅斯年宛ての聘信が保存されているかも知れず、もし残っていれば少なくとも辭退の表面的な理由は分かるはずである。今後の調査に俟ちたい

⁶ここで李滂文書と稱するのは、現在北京の艾俊川氏が所藏する李滂の草稿類一括を指す。やはり注3の小文をご覧いただきたい。

⁷董、周は、恐らく李滂が姓しか記憶しなかったためか、『友語録』稿本でこのように書かれている。董は董作賓の可能性が高いが、周は不明である。

云。予在旁憇憇之。飯畢，家大人先歸，予同楊朱董周傅陳諸公往午門歷史博物館見陳列，有鉅鹿縣出土之矧椅各一及門板數塊，某定爲北宋時物。予曰，此乃道地的宋板。杏佛先生徐徐曰，如將此板刻成康熙字典，前人譏語，今成事實，豈不快哉，綵大笑。又登端門，樓中有大鐘，一看管人將門打開，予等進室中，其中有不可言之奇味，趙萬里曰，此味如海魚蝦之興味。予促之曰，速走，速走。予隔夜飯將要出矣。綵笑下樓而散。

是日陳寅恪言，有人藏有明板黃大興《梅苑》？予曰，此書有二本，一爲曹寅棟亭十二種本，一爲武進李氏（祖年字搢臣）聖澤樓刻本，附刻有蜻勘記。又今春見傅元叔得刻本，板心絕似文選樓刻，本書惜無刻書姓名及年月。然以刻工，可定爲嘉道間刻本也。明板，予未之見過，諸家書目亦罕有明板，惟陸氏目有汲古景鈔宋本。朱筠先言，奉天某軍人得西夏文字數箱。予曰，此事今春已聞友人談及其中以《妙法蓮華》等經爲多數云。朱曰，今已歸三集團軍人，現運至東交民巷某處存放，有人出五千元，尙不售云。

ここに抄出したのはもちろん『友語録』の一部に過ぎない⁸。ここに挙げていない残稿の開頭部に己巳（1929）の干支があるので、幸いに同年のことと知られる。この年の陽暦7月26日⁹、傅斯年が李盛鐸を食事に招待した。場所は北京什刹海の會賢堂、名にし負う高級飯荘である。この年、歴史語言研究所は廣州から北京の北海靜心齋に所址を移したばかりであった。同席したのは、當時中央研究院の總幹事であった楊杏佛（楊銓、1893-1933）と、朱筠先（朱希祖、1879-1944）、陳寅恪（1890-1969）、趙萬里（1905-1980）などの人々で、李滂も同席した。史語所では、この年の3月に李盛鐸の所藏する明清叢案を購入し得たが、この日の招待は、その謝禮の意味があったものと思われる。

よく知られているように、内閣大庫の明清叢案は民國十一年（1922）當時これを保管していた歴史博物館から同懋増紙店に拂い下げられ、まさに造紙原料として潰されようとしていたところを、羅振玉が私財を抛って購入したため、辛くも消滅を免れることができた。いわゆる“八千麻袋事件”である。その後、羅振玉は一部を《史料叢刊初編》十冊として出版したが、民國十三年（1924）若干を手許に留めたほか、残餘の全てを李盛鐸に轉賣した。傅斯年はすでに1928年9月11

⁸ただし六月廿日の記事としては、これがすべてである。

⁹李滂は六月廿日の日付に自ら注記して「陽暦七月廿七日」としているが、実際には一日早い7月26日の筈である。いま華曆に従い、この日を陽暦7月26日と定める。

日、中央研究院院長の蔡元培に李盛鐸所藏の明清叢案購入を懇請していたが¹⁰、まもなく馬衡の仲介により一萬八千元の代價を支拂うことで、所期の如く實現したものである。實際に叢案が天津の李家から北京の午門樓上に移送されたのはこの年の9月で、そのために徐中舒が派遣されて事に當った¹¹。

創立間もない歴史語言研究所では、“直接史料”(一次史料)の利用を唱道し¹²、鋭意それらの収集に努めていた。内閣叢案の購収もその基本方針の一環であったことはいうまでもない。1925年7月、王國維(1877-1927)は清華研究院に於いて「最近二三十年中中國新發見新之學問」と題する有名な講演を行ったが¹³、その中で近年の重要な新發見として、「殷虛甲骨文字」、「敦煌塞上及西城各地之簡牘」、「敦煌千佛洞之六朝唐人所書捲軸」、「内閣大庫之書籍叢案」そして「中國境内之古外族遺文」の五つを挙げ、どれ一つを取っても、古代の孔子壁中書或いは汲冢書に匹敵する大發見だと極めて高い評價を與えている。王國維は歴史語言研究所創立の時點ですでに物故しているが、史語所が“直接史料”を重視したのには、明らかにその影響を見て取ることができる。これら新史料の収集と整理公刊に絶大な努力を拂い、新しい學問の風氣を醸成した最大の功績者は、王國維の師であり協働者の羅振玉であった。傅斯年が李滂宛の書簡中に“羅君收藏不富于尊府”と言い、それら藏品を李滂の名で出版すれば“羅君老者，當羨琢之”と言葉を費やしているのは、もとより説得のための言辭ではあるが、ことさら羅振玉の名に言及したのには、一方で傅斯年がいかに羅振玉の功績を高く評價していたかを證するものである。同時に王國維が示した路線を今後史語所が擔い、更に發展させていこうとする意欲を感じさせる。

このような氣運の中で、史語所が敦煌遺書をふくむ李氏の藏儲に大きな關心を寄せたことは當然であった。傅斯年の李滂宛書簡は、原稿に陳寅恪の手が入っていることで分かるように、陳寅恪との緊密な連絡のもとで書かれたものである。1928年10月に陳寅恪が傅斯年に宛てた書簡に、趙萬里から聞いたこととして“李木齋亦藏敦煌卷子甚佳者，秘不示人”とあるから、陳寅恪が李盛鐸のもとに敦煌遺書が所藏されていることを知ったのはこの頃であつたらしい¹⁴。では史語所における

¹⁰1928年9月11日傳致蔡元培書信、『傅斯年遺札』第1卷、147-149頁。

¹¹徐中舒「内閣叢案之由來及其整理」『明清史料』第1本、民國19年9月、中央研究院歴史語言研究所。

¹²傅斯年「中央研究院歴史語言研究所工作之旨趣」『中央研究院歴史語言研究所集刊』第1本第1分(1928)。

¹³講演原稿は『學衡』第45期(民國14年9月)に發表され、また翌年『科學』第11卷第6期(民國15年6月)にも掲載された。

¹⁴『陳寅恪集・書信集』北京：生活・讀書・新知三聯書店、2001年、20頁。また永田知之「陳寅恪論及敦煌文獻雜記——利用經路を中心に」『敦煌寫本研究年報』第6號(2012)、227頁を参照。

陳寅恪の立場と、敦煌遺書との関係はどうだったであろうか。

まだ廣州に在った頃の史語所の編制は、(一)史料學組、(二)漢語組、(三)文籍校訂組、(四)民間文藝組、(五)漢字組、(六)考古組、(七)人類學組、(八)燉煌材料研究組となっており¹⁵、陳寅恪は「史料學組」の擔當、「燉煌材料研究組」は陳垣(1880-1971)が責任者であった。民國十一年(1922)春、教育部次長であった陳垣は京師圖書館館長を兼ねると、すぐさま館員俞澤箴を督して館藏の敦煌遺書八千餘巻の目録編纂に取りかかり、三ヶ月でその事を竣えた。更に十三年(1924)葉恭綽(1881-1968)を發起人として北平に敦煌經籍輯存會が設立されると¹⁶、舊稿を整理し『敦煌劫餘録』と命名した¹⁷。この目録は後に歴史語言研究所から正式に出版されることになる¹⁸。したがって「燉煌材料研究組」を陳垣に委ねるといふ決定は、この時點では當然すぎるほど當然であった。

一方で、陳寅恪はこの頃、北平圖書館で熱心に敦煌卷子の調査を行うとともに、清華大學で敦煌文獻を講じており¹⁹、陳寅恪の生涯の中でもっとも敦煌文獻に親しんだ時期であったと言ってもよい。しかも歴史語言研究所は、北平移轉後に編制換えを行い、それまでの八組制から、史學、語言、考古の三大組制に移行し、陳寅恪はその第一、史學組の主任となった。當然、敦煌文獻はその管轄内に入り、同時に陳垣編『敦煌劫餘録』の出版も史語所の正式事業となった。この目録が1931年に出版された時、陳寅恪が有名な序文を寄せたのは、職務上の責任でもあったのである。

新しい體制のもと、陳寅恪が更なる敦煌文獻を獲得すべく、李家の寫本に想到したとしても何ら不思議はない。しかも李家には敦煌文獻だけでなく、他にも重要かつ豊富な收藏品が揃っている。その精華を史語所の手で公刊するために、陳寅恪が傅斯年と謀って李滂の招聘に乗り出したのも自然な成り行きであった。そのきっかけとなったのは恐らく李滂の『友語録』に見える招宴ではなかったか。内閣大庫の明清檔案は、以前から「史料學組」が擔當であったため、その購入には陳寅恪が直接の責任を負っていたはずである。購入決定に際して李盛鐸を招待した宴席に、所長の傅斯年とともに陳寅恪が出席していたのは當然である。しかしそ

¹⁵1929年1月6日傅斯年致蔡元培、楊銓(杏佛)書信、『傅斯年遺札』第1卷、176-180頁。1月10日付の蔡元培宛書簡でも同じ構成になっている。同上、182頁。

¹⁶敦煌經籍輯存會の設立年代については幾つかの説があるが、いま陳垣自身の説による。異説については、孫玉蓉「“敦煌經籍輯存會”設立時間探求」、『理論與現代化』2008年第4期、106-109頁を参照されたい。

¹⁷陳垣『敦煌劫餘録』(中央研究院歷史語言研究所專刊之四、1931年3月刊)自序。

¹⁸注16。

¹⁹永田知之「陳寅恪論及敦煌文獻續記 遺墨「敦煌研究」と講義「敦煌小説選讀」」、『敦煌寫本研究年報』第8號(本號)83-104頁。

ここで李滂に相見える機会があったことが、この招聘計畫につながることになるのだが、これには少し偶然の要素があったかもしれない。

李滂は李盛鐸の薫陶を受けて育ち、目録學では早くから人並み以上の知識を持っていたと言われる。宴席で陳寅恪の問い掛けに對して、我が意を得たりとばかりに蘊蓄を傾けたのには、さすがの陳寅恪も驚いたと思われる。この青年を招聘して李家の史料を公刊させようというアイディアはこの時に浮かんだのではなからうか。そして傅斯年と相談の上、それを實行に移そうとしたのである。もしそうだとすれば、傅斯年の書簡は、この招宴の後、1929年の陽曆7月27日以降に送付されたものとなる。しかも最後に“願駕返天津前，弟獲一趨左右也”とあるところを見れば、李盛鐸と李滂が北京から天津に歸るまでのことと見なければならず、7月末數日中のことだったのであろう。

李盛鐸舊藏の敦煌遺書が、その後1935年に、武田長兵衛の資金援助により羽田亨の購収するところとなったことは、今日誰しも知るところである²⁰。しかし、その以前に史語所によるこのような試みがあったことは餘り知られていない。ここに些か數言を費やした所以である。

(作者は京都大學人文科學研究所教授)

²⁰ 拙文「李滂と白堅 李盛鐸舊藏敦煌寫本日本流入の背景」『敦煌寫本研究年報』創刊號(2007) 1-26頁。